佛立開導日扇師における日隆教学の受容と展開

福岡良樹（日雙）

一、はじめに

江戸末期の一八五七年（安政四）、京都で本門佛立講（現・本門佛立宗）を開いた日扇上人（長松清風・一八一七～一八九〇）は、のちに「幕末維新が生んだ民衆仏教の唱導者」[1]として評価されることになるが、日扇上人（以下、日扇師）自身は、

「釈尊の御使、宗祖也。宗祖の御使、門祖也。門祖の御使、清風也。門祖は宗門再興也。清風は隆門再興也。」[2]

と記しているように、自らを宗祖日蓮聖人と八品門流の祖、日隆上人の正統なる継承者、復興者として規定していた。

日扇師が蓮、隆両師より継承し、復興しようと志したものは、その教学にとどまらず、教学の要請するところを弘通、布教活動において〝事相化〟するところにあった。

本論では日隆師のいわゆる八品教学の特質を挙げ、その正統なる継承者たらんとした日扇師が、それをどのように受容し、幕末から明治初期という混迷期、時代の転換期にあって、弘通の現場にいかに事相化したかを論じてみた。

二、日蓮聖人、日隆師、日扇師の系譜

1、日蓮門流における日隆師の位置

日隆師（慶林房、本門佛立宗では再興正導門祖日隆聖人と尊称している。）は宗祖日蓮聖人入滅より百三年後の一三八五年（至徳二）に生れ、十四歳で出家、十八歳の時上洛して妙本寺に入った。

日隆師のそれ以降の弘通と著述の両面における活動を概述する前に、日蓮門下の京都への進出とその経緯、日隆師が京都で弘通を開始する時期の時代相、門流の状況を概観しておきたい。

京都を中心とした西日本の弘通の先駆者は、宗祖日蓮聖人（以下、宗祖と略す）の遺弟で、宗祖滅後、六老僧の一人、日朗師の附弟となった日像師（一二六九～一三四一）である。日像師は宗祖滅後十二年目、一二九一年（永仁二）京都に入り、積極的な弘通活動を展開し、次第に町衆や有力者の帰依を得て京都における弘通の基礎をつくっていった。日像師の活動に脅威を感じた比叡山天台宗からの攻撃や諸宗派の訴えによって三回にわたって京都追放の院宣を受けたが、一三二一（元亨元）には四条に妙顕寺を建て、一三三三年には同寺が勅願寺になることによって、その活動は公的に認められることになる。

十四世紀の後半になると、南北朝の争乱を経て室町幕府が成立すると共に、政治の中心は再び京都に戻り、これにともなって日蓮各門流の京都への進出が活発になり、日蓮門下の諸寺院は京都の町衆を中心とした商工民に広く迎え入れられることになる。

京都における日蓮門下各寺院は対外的には弘通の拠点として著しい進展を示したが、一方、内部では化儀（弘通方

法）と化法（教学）の両面で宗祖の本意を逸脱する活動や解釈がなされるようになった。

化儀、すなわち弘通、布教の面についていえば、宗祖が、

「信心ふかき者も法華経のかたきをばせめず、いかなる大善をつくり、法華経を千万部読書写し、一念三千の観道を得たる人なりとも、法華経のかたきをだにもせめざれば得道ありがたし」[3]

「法華経独り成仏法也と、音も惜まずよばわり給いて、諸宗の人法共に折伏して御覧ぜよ」[4]

「権実雑乱の時、法華経の御敵を責めずして山林に閉籠り、摂受を修行せんは豈に法華経修行の時を失う物怪きにあらずや」[5]

等と末法における化儀は摂受に非ず折伏行と規定したにもかかわらず、京都における日蓮門流の中には、弘通意欲を失い、世俗に迎合し、権勢や名聞を求める僧が次第に多くなりつつあった。

また、化法、すなわち教義の解釈についていえば、いわゆる中古天台本覚思想の影響を受けて、善悪、仏凡、迷悟、浄穢といった相対する諸相を超えた不二絶対の理を説く思想を受け入れ、それにともなって教学面でも摂受的、妥協的になり、本迹釈においても、宗祖が

「法華経に又二経あり。所謂迹門と本門となり。本迹の相違は水火天地の違目也」[6]

「滅後末法の今の時は一向本門の弘まらせ給うべき時也。乃至、日蓮は今、時を得たり。豈に此所属の本門を弘めざらんや」[7]

等と明示しているにもかかわらず、諸門流において本迹一致を容認するようになり、さらに、

「末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや。答て云く、法華経の題目を以て本尊とすべし」[8]

と説示し、南無妙法蓮華経の文字曼荼羅を本尊として顕されたにもかかわらず、諸仏、諸菩薩、諸神を造立し、これらを雑乱勧請する崇め方が当然の如くなされるようになった。

日隆師が入寺した妙顕寺もまたそのような化儀、化法にわたる法規の乱れた状態に陥りつつあったが、とりわけ妙顕寺が将軍足利義満の命で再興され、月明が二十五歳の若さで同寺第五世となってからはその傾向が著しくなった。月明は名門、三条家の出身といわれ、権勢欲、名声欲が強く、行学二道や弘通には熱意を示さなかったため、寺内の風紀は著しく退廃することになる。日隆師は伯父にあたる日存、日道両師と共に月明を諫めたようであるが、かえって月明の怒り、怨みを買うことになり、ために妙顕寺退出を余儀なくされる。

その後、日隆師は本迹勝劣義を唱えて一致義を唱える諸門流を折伏すると共に、独自の弘通活動を展開し、一四一五年（応永二）には京都高辻油小路五条に本応寺（のち本能寺）を開き、さらに河内、摂津から北陸、岡山等を巡って弘通に力を注ぎ、尼崎の本興寺、兵庫の久遠寺、北陸色ヶ浜の本勝寺、岡山本隆寺など十四ヶ寺を設立するなどの足跡を残した。

日隆師は一方で宗祖日蓮聖人の遺教を教学的に体系化する著述活動にも意欲を示し、古来三千余帖（実数は三百余巻）と称される教学解明の書を残した。

日隆師はこうした著述を通して、末法は久遠と同じく下種益の時であり、衆生は本未有善の機であるから、本門八品所顕、上行所伝、本因下種の御題目のみを我も唱え、他にも勧める名字信行こそが宗祖の本意に叶うと終始一貫論じ続けた。

2、日扇師と本門佛立講

日扇師（本門佛立宗では、日扇聖人、開導聖人、大尊師と尊称している）は一八一七年（文化十四）京都に生まれた。生家は小間物屋を営む、いわゆる町衆であったが、その家系からは多くの文人が輩出し、自身も当時としては恵まれた家庭環境の中で、書、詩、画等幅広い教養を高めながら育った。十歳の時には当時の京都における文化人、芸術家の名を紹介した『平安人物誌』の書画の部にその名が載せられるほどの力量を示している。

十七歳から城戸千盾（本居宣長の門人）に師事して国学を学び、二十五歳の時には城戸門人の中から選ばれて、公家の千種有功の邸で毎月一回『源氏物語』を講じている。

日扇師は同時に仏教にも次第に強い関心を示すようになり、仏教各派の教義を学んだり、諸寺院を訪ねて参禅したり参籠したりするようになる。

さらに、二十六歳の時、母と死別したこと、そしてその後、遊学先の江戸で重病に倒れたことが契機となって一層仏教に傾倒し、二十九歳の時、日隆師を開基とする本能寺塔中の院主、日雄師の教化を受けて本門法華宗に入信。三十一歳の時、淡路隆泉寺の日耀師を師として出家得道した。

その後、教学を学ぶため尼崎本興寺勧学院に入檀しようとしたが、すでに文人としてその名を馳せており、諸宗の教学にも通じていた日扇師は、入檀を快く思わない檀林の僧たちの反対を受けて入檀を阻まれることになる。

江戸末期、同宗に限らず仏教の既成教団は幕府の保護、管理下におかれ、なかば国教の観を呈し、幕府の御用宗教化していた。そうした状況に長く置かれていた諸教団の多くの僧は形式的な伝統に固執し、布教の精神を失い、ただ死者の弔い、法要儀式を専らとするようになっていた。

日扇師はそうした状況下にあって宗門を蓮隆二祖の本意に叶う教団に復興せんとの意欲を懐いて教団の改革を計ろうとしたが、逆に教団内より激しい反撥、排撃を受けるにおよび、一八五七年（安政四年）正月十二日、京都蛸薬師の千切屋八品堂の谷川浅七宅で本門佛立講を開講するにいたる。その時の聴衆はわずか四、五人であったという。その経緯を日扇師は

「清風三十二歳にして法を淡州に求め、津久井の隆泉教寺において無著尊師を師とたのみ、僧中の内証をうかがう所に、無道念の火宅僧のみにて今は愛想も尽きはてたり。故に仏立講を開立して諸宗諸門流を責むるなり。仏立宗は法華宗のみ。今は本門仏立宗なり」

と記している。

以後、日扇師率いる本門佛立講は年を追うごとに京都、大津、大阪を中心に弘通を進展させていくことになるが、それにともない既成諸宗派からの反撥、迫害も多くなり、自身「牢に三度　入られ八度　処をば　追い出されつつ立てしこの講」と詠み残しているように苦難に遭うことになる。

一八九〇年（明治二十三）七月十七日、佛立講大阪玉江組の講元、秦新蔵宅へ参詣する途中、休息をとるため立ち寄った守口の茶房、森田伊六宅（現在、本門佛立宗義天寺）で七十四才の生涯を終えた。

上述のように、本門佛立講の開講は江戸末期の安政四年であるが、日扇師自身は

「別にわれと一宗を開くに非ず。仏説のままを宗祖立てさせられて本門佛立宗也。其弟子は当宗を流布するのみ也」[10]

と記しているように、宗祖日蓮聖人によって伝え弘められた宗旨と規定していた。

なお、本門佛立宗という宗名については、宗祖の

「法華宗は釈迦所立の宗なり。其の故は已説今説当説の中には法華経第一なりと説き給ふ。是れ釈迦仏の立て給ふ処の御語なり。故に法華経をば**仏立宗**と云ひ、又は法華宗と云ふ」[11]

の文や、日隆師の

「末法建立の本門法華宗は能開能生の根本宗也。此の故に釈尊上行菩薩所立の**佛立宗也**」[12]

の文を拠りどころにしつつ、

「本門法華日蓮宗は久遠実成の仏の立てさせ給いし宗旨なる故に仏立宗という。経に云く、『諸経中王、最為第一』斯の如く立てさせ給いし故に、其の趣を解説教導する故に仏立講と云う」[13]

と、その選名の由来を日扇師自ら記している。

三、日隆教学の特長

本章では日隆師の教学の特長を概観しておきたい。

日隆師の著作は三百六十余巻にのぼるとされているが、その中より主要な著述を挙げると、宗義に関しては「四帖抄」（法華天台両宗勝劣抄）、「十三問答抄」「一帖抄」（玄義教相見聞）「私新抄」「開迹顕本宗要集」「六即私記」「五時四教名目見聞」等があり、法華経を宗祖の立場より註釈した著述として「法華宗本門弘教抄」があり、宗祖遺文の活釈書としては「本尊抄私見聞」「御書文段」等がある。

日隆師の著作はそのほとんどが宗義に関するものであるが、そこには一貫して宗祖の遺文に直参してその本意をひ

たすら拝受しようという真摯な求道心と不屈の意思、そして純粋な護法の念を伺うことができる。

日隆師が宗祖の本意を明らかにするため、とくに文段を付して重要視した遺文を挙げると以下の通りである。

御妙判名	異称	祖寿	著作地	真蹟	昭定
如来滅後五五百歳始観心本尊抄		52	佐渡一谷	○	七〇二
如説修行抄		52	佐渡一谷		七三一
法華取要抄		53	身延	○	八一〇
曽谷入道許御書	大田禅門許御書	54	身延	○	八九五
四信五品抄	末代法華行者位並用心事	56	身延	○	一二九四
本尊問答抄		57	身延		一五七三
一代聖教大意		37			五七
守護国家論		38			八九
法華題目抄		45	清澄		三九一
十章抄		50		○	四八八
開目抄		51	佐渡塚原		五三五
法華宗内証権実違目		52	佐渡一谷		六九一
当体義抄		52	佐渡一谷		七五七

立正観抄		53	身延		八四四
撰時抄		54	身延		一〇〇三
報恩抄		55	身延		一一九二
富木入道殿御返事	治病大小権実違目、治病抄	57	身延	○	一五一七

上記十七通の遺文の中でも日隆師が宗祖の信仰の真髄を学ぶ上で看過できない最重要書として挙げたのは、

「天台妙楽、内鑒冷然の密意を日蓮大士の外適時宜に移して、観心本尊抄と号し、四信五品抄と称し、如説修行抄と名く」[14]

と位置づけた「観心本尊抄」「四信五品抄」「如説修行抄」の三書であった。

こうした宗祖の遺文を通して日隆師が闡明した教学の帰着するところは「本門八品所顕」「上行所伝」「本因下種」の御題目を一向令唱する事行の信心に徹するということに他ならない。

以下、日隆師自身が御題目に冠した「本門八品所顕」「上行所伝」「本因下種」の意味するところを、日隆師の著述を辿りつつ明らかにし、もって日隆教学の特長を探ることにしたい。

1、本門八品所顕

日隆師の教学を特色づけるものは、「本門八品を以て最要と為す」点であろう。[15]

日隆師が本門八品正意論を唱えたのは

「観心本尊抄の中に委悉なり。謂く『但地涌千界を召て八品を説て之を付属し下う』『其の本尊の体たらく』云々。次の文は『八年の間にも但八品に限る』云々。又次下に『本門を以て之を論ずれば一向に末法の初を以て正機と為す』云々。『本門八品は序正流通共に末法の初を以て詮と為す』云々。『末法の初と』云々。『此は種なり』云々。『此は但題目の五字なり』と云々。七ヶ処の文は一同にして本門八品を説て南無妙法蓮華経を以て本化上行等に付し末法下種に備て下機を助くべき事を説くなり」[16]

とあるように、宗祖の「観心本尊抄」にその文証を得てのことであるが、教学的には宗祖が踏まえたところのいわゆる「第三の法門」を拠りどころにしてのことであった。

宗祖は

「日蓮が法門は第三の法門也。世間に粗夢の如く一二をば申せども、第三は申さず候。第三の法門は天台、妙楽、伝教も粗之を示せども未だ事了えず。所詮末法の今に譲り与えし也」[17]

と、天台大師智顗が「法華玄義」巻一上で展開した釈尊の教説の勝劣浅深を判定するために用いた三段階の判法、三種教相の第三段階、すなわち久遠に立ち帰ったところで論じられる法門を末法の立場で捕らえ直し、末法の時機に相応する教法と、その教法に基く信行のあり方を伝え弘めようとしたのであるが、日隆師はこの久遠における法門を本尊抄の教説に基き法華経本門八品と規定した。

すなわち、日隆師は宗祖が観心本尊抄において

「本門は序・正・流通ともに末法の始をもって詮となす。在世の本門と末法の初とは一同に純圓なり。ただし彼は脱、これは種なり。彼は一品二半、これはただ題目の五字なり」[18]

とした本門とは、

「此本門肝心於南無妙法蓮華経五字佛猶文殊薬王等不付属之。何況其已下乎。但召地涌千界説八品付属之」[19]

とあるように、上行等の地涌の菩薩への付属の儀式としての本門八品であり、この教説こそが「日蓮が法門」「第三の法門」であるとしたのである。

日隆師が上行在座の法門、すなわち本門八品をもって久遠本地の法門としたのは、宗祖の上記の教説に従ってであるが、同時にこの本地における本門八品の教説は、在世と末法を相対して、仏意を探るとき、

「此の在世滅後の中には何れの衆生を以って釈尊出世の本意と為す可きや、否や、然るに佛心とは大慈悲心是れなりと云うて三世に経て諸佛の慈悲利生の境界を尋ぬれば在世の聖者より滅後の悪人を以て出世の正意と為すなり」[20]

として、在世の衆生に脱益を蒙らしめるよりも、本門八品を説いて末法の衆生に下種益を蒙らしめることにあるとしたのである。

2、上行所伝

日隆師は

「日蓮宗の宗旨は本門八品上行要付の本尊を以て宗要と為す間、涌出品より属累品に至る八品を滅後末法の為の正説也と宗旨を定むる間、妙法蓮華経の立所は本門八品なり。此れは本化上行の手取りの付属の辺を本意と為す故なり」[21]

と、本門八品所顕の御題目は能弘の人に立てば「上行所伝」の御題目であるとし、上行菩薩の垂迹、人界示同の尊形としての宗祖の伝え弘めるところの御題目を「上行所伝」と規定した。

宗祖を上行の再誕、垂迹とする見解は他の門流にもあって、日隆師独自のものではないが、日隆師における特質は

「諸門流の人々は上行菩薩に勝れたる釈尊第一の御弟子なるらん。故に釈尊より直授して之を取る、日存日道の両師は数ならざる下劣の御事にて之れあり。故に釈尊より以要言之して上行の御手に請取り玉ひたる妙法蓮華経を日蓮大士の御手より取り玉うなり。所謂本門八品是れなり」[22]

と諸門流における上行所伝軽視の風を批判し、崇めるべきは、上行の後身としての宗祖を介したところの南無妙法蓮華経であると明確に規定した点にある。

3、本因下種

日隆師は宗祖の

「本門をもってこれを論ずれば、一向に末法の初めをもって正機となす。いわゆる、一往これを見る時は、久種をもって下種となし、大通・前四味・迹門を熟となし、本門に至って等妙に登らしむ。再往これを見るに、迹門には似ず。本門は序・正・流通ともに末法の始をもって詮となす。在世の本門と末法の初とは、一同に純円なり。ただし彼は脱、これは種なり。彼は一品二半、これはただ題目の五字なり」[23]

の文に基き、在世と末法の時機を相対して、釈尊出世の本意は過去久遠に一度下種退転し熟益の化導を蒙りつつ釈尊在世に生まれあわせたいわゆる本已有善の衆生と規定される機に脱益を蒙らしめるよりも、滅後末法無仏世に生まれ

出る本未有善の機を下種成仏せしめることにあるとした。

従って法華経本門の正宗分寿量一品二半には二つの意義、目的が存することになる。一つは在世の衆生を脱益せしめるためであり、もう一つは末法の衆生で下種益のためである。

しかしながら、日隆師は

「一品二半をもって本門の正宗となすは、在世脱益の一辺なり。未だ経旨を極めず、これ一往の経釈なり。再往は、本門八品上行要付をもって、真実の経釈となす。これ滅後下種のためなり。この時、法華経一部の経旨極成するものなり」[24]

と捕らえて寿量一品二半の教説が末法の衆生にとっての下種益の仏種子の在所となるためには、この一品二半を本門八品体内に含みこんで上行に付属するという手続きを経る必要があるとした。

日隆師がこのように宗祖によって伝え弘められた御題目は「本門八品所顕」であり、「上行所伝」であると共に「本因下種」であるとしたのは、

「下種と即身成仏とは同じ物なり。本門流通の心は名字即の信行を以て即身成佛の正位と為すなり。正下種は名字即なる故に、即身成佛の正意も名字即なり」[27]

「最初下種は悉く本門本因妙の名字信心にあり、故に信心を以て佛の種子と為す」[28]

と述べるように、末法下種の実体は本因妙の名字即に立った信行そのものであり、このような信行は寿量一品二半のみでは導き出されず、

「涌出品には本因妙を明し、壽量品には廣く本果妙を明し、略して本因妙を宣ぶ、本因妙の行相をば分別品の四

信五品已下五品半に之を説く、故に知んぬ涌出品已下の八品を総持すれば、「以要言之」の妙法蓮華経なり」[29]と、本門八品を不可分の教説とし、その教説は上行を介して伝えられるとき、はじめて御題目は「末代幼稚の頸に懸けさせめ給う」[30]ことのできる要法となるとしたためである。

4、日隆師の成仏論

日隆師は上述のように「名字即の信行を以て即身成仏の正位と為すなり」としたが、このような成仏の相の規定は、宗祖の「四信五品抄」における次のような説示を拠りどころとしたと思われる。

「分別功徳品の四信と五品とは、法華を修行するの大要、在世滅後の亀鏡なり。荊谿の云く、『一念信解とは即これ本門立行の首なり』と云々。その中に現在の四信の初めの一念信解と、滅後の五品の第一の初随喜と、この二処は一同に百界千如、一念三千の宝篋、十方三世の諸仏の出門なり」[31]

「仏正しく戒定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る。慧また堪えざれば信をもって慧に代う。信の一字を詮となす。不信は一闡提謗法の因、信は慧の因、名字即の位なり」[32]

「問て云く、末代初心の行者何者をか制止するや。答えて曰く、檀戒等の五度を制止して、一向に南無妙法蓮華経と称せしむるを、一念信解初随喜の気分とするなり。是即ちこの経の本意なり」[33]

すなわち、宗祖は末法における成仏の相とは戒定慧の三学を修して転迷開悟し断悪証理し、六即の階梯を昇って究竟即に到ることではなく、断疑生信、以信代慧して一念信解、初随喜の境地、すなわち名字即に居して一向に御題目を信唱する姿にあるとした。

日隆師は、この説示に基いて、

「十界久遠と云う久遠は名字即下種の信心の事なり。此の信心を本覚と名く、此の本覚の本は久遠名字下種に還帰して成仏すると云う事なり」[34]

であるから、

「蓮祖の門弟は末法相応の本門事行観心の機是れなり。此の機は本門流通の名字信位に居す故に信心入の機なり。此の信心入の観心とは但信心の一念を以て解行に移さず五字の法体を思慮せず口に任せて唱へ奉る処より外に余念を置かず、但口に唱うる所自然として微塵数の経巻三世諸仏を但一口に含み奉る故に思はず量らず大智者と成り忽ち即身に釈尊上行の覚位に登り速かに寂光の宝刹に至らん事疑ひ有るべからざるものなり」[35]

と本因妙位の成仏、すなわち信行成仏、口業正意の成仏論を説いた。

5、本尊論

宗祖日蓮聖人の顕した本尊の様相は「観心本尊抄」に

「その本尊の為体、本師の娑婆の上に、宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華経の左右には、釈迦牟尼仏・多宝仏。釈尊の脇士は上行等の四菩薩。文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸菩薩は、万民の大地に処して雲閣・月卿を見るがごとし」[36]

と述べるように、中央の南無妙法蓮華経の左右に二仏、本化の四菩薩他迹化の菩薩等を配した、いわゆる十界の文字曼荼羅であるが、これらの聖衆は

「釈尊上行を初めとして一会の大衆皆悉く久遠本因妙名字信行の寿命海中に安座して教弥実位弥下の易行の本尊聖衆と顕れ玉えり」[37]

と、日隆師は本尊体内の釈尊、上行はじめいわゆる十界聖衆はことごとに本因妙名字即に居して御題目を唱える信行の姿をとって顕れるものと受けとめた。

なぜなら、本尊とはたんに拝まれる対象、すなわち境としてあるのではなく、自ら自行化他の信行の相を示す〝事体〟であるが故に末法の行者の手本としての本尊たりうるのである。このようなかたちでの本尊の様相はそのまま久遠における根源、究極の信行形態であり、下種とはこの久遠における信行の姿をそのまま上行菩薩を介して信受することに他ならないとし、事の御本尊に向かって行者もまた一念信解、初随喜の名字即の境地に居して御題目を唱えるとき、行者もまた御本尊と感応し、御本尊の中へ流入することになるとした。

故に、日隆師においては、本尊とはたんに拝み崇められる対象、すなわち境ではなく、行者の口唱する題目を照覧し、これに呼応するところの智そのものに他ならないとする。

「本門円宗の意は末法悪世の衆生を以て正機と為す故に境智其意別なるべし。其故は首題の五字を以て智と為し、行者を以て境と為す。是れ即ち極悪深重の行者なる故に自身の智恵を起して三千の境に冥合する事之れ無し。但だ口に任せて南無妙法蓮華経と唱え奉る、行者の音声即妙法也と釈迦上行菩薩之を照さば、行者の己心の音声即ち法界周遍の妙体、萬徳円満の仏身なり。行者は更に之を知らず。本仏は之を照す。仍て本仏の智と行者の口唱の題目の境と境智冥合するなり」[38]

と説く所以である。

四、日扇師における隆師教学に基く弘通形態

佛立開導日扇師は一八六三年（文久三）、四十六才の時入手した日隆師の著「一帖抄」（玄義教相見聞）の書入れに

「此迄も諸宗には迷わねども一品、一品二半流等に迷われしを、開基尊聖の御指南を得て初年来の疑網を一時に破し決定して八品門流のみ高祖聖人の御正流なる事を知覚する事開山の御蔭也と感激止み難し大慈大悲大恩報謝。実に此御指南なくは内外の御抄の淵底とてもしる事能はず。実に開山聖人は蓮師後身なる事疑うべきに非ず大慈大悲大恩報謝。

開基の尊抄にあい得ぬまでは、とやあらんかくやあらんと、まどわれしを此等の御しるべのかたに。

清風

はるの日のひかりにあわぬいままでは
たどるたどるぞ道はあゆみし」[39]

と自ら記しているように、日隆師をいわば水先案内人として宗祖の本意に辿りつき、蓮隆二祖の後継者、復興者としての自覚、確信を懐くに到った。が、同時に時代の変革期にあって沈滞した日本の仏教界の実情を憂い、その改革、活性化を目指した日扇師は、日隆教学を観念的な学としてのみ受容し、継承することにあきたらず、自らの信行の中に、そして弘通活動の場においてその教学の要請するところを具象化、事相化しようと試みた。

以下、日扇師が本門佛立講というかたちで日隆教学をいかに受容、継承し、事相化したかについて、五つの特徴的弘通信行形態を挙げるかたちで論じてみたい。

1、信行成仏

善因善果、あるいは善因楽果は仏教の基本教理である。従って自ら信心修行という因を修めぬ者には成仏という果報が得られる道理はないという仏因仏果論は我が国に伝わった大乗仏教にも一貫して流れる基本教理であるはずであった。

しかしながらこの精神は徳川幕府が設けたいわゆる檀家制度の影響もあって、江戸時代に入って次第にゆがめられていくことになる。

日扇師が入信した本門法華宗にあっても他の諸宗派同様、多くの僧は布教意欲を失い、死者の回向、弔いのみを専らとするようになっていた。当時、宗内にあっては、そのような死者の弔い、葬式中心の儀礼、法要を過度に意義づけし、正当化するため、生前にまったく信行を修めなかった者であっても、ひいては犬、猫などの畜生界の生類であっても、その死後、十界皆成を説く法華経で回向すれば、その経力によって成仏させることができるという見解が宗内の大半の僧に支持されるようになっていた。

このような宗内の風潮に対し、日扇師は「本門の回向力にて三途のもの、人界に浮び出る」[40]のであって、これをもって成仏とするのは筋違い。自らが信行に励むという仏因を修することなくして、真の成仏、すなわち仏果を得るなどという論は宗祖の教え、ひいては仏教の本義を歪曲するものと反論、積極的に啓蒙活動を展開していったが、こうした日扇師の活動は多くの僧の反撥、反感を買うことになった。

この信行成仏か回向成仏かの論争は〝皆久論争〟〝三途成不論争〟と呼ばれ、左のように日扇師自身が記している

ように、日扇師が本門法華宗と袂を分かち、本門佛立講を開講する発端となったが、その経緯は他の稿に譲りたい。[41]

「高祖御入滅後一致勝劣の争論第七回忌已後より起り蘭菊なりしを、門祖再びもとの法水にかへし、久遠本因妙下種の御法、蓮師大士御出世の御本懐に色もかわらぬ振りすすぎの御正流八品門流を再興ましましたり。されば、蓮隆両祖の御流れをくみ、上行所伝の御題目を信行口唱する身となりぬる御門流の弟子檀那の仕合せ有難きを、又清き流れの門流の中に習ひ損じの出来して、人界名字の一即信行口唱の即身成仏を談ずる門中に、無信無行の畜生を異体同心の即身成仏の中に入るるの大謬見起りしにより、その濁りに雑はらじと、安政巳年正月十二日、八品堂谷川浅七宅において開講せる本門佛立講なり。即ち経文・天台の釈・両祖の御抄・御指南によりて当家正流を水際だてて結び弘めたる本門佛立講なり。これ当講興起の来由なり」[42]

上記のような経緯によって佛立講を開いた日扇師は、

「死人の回向は仏法の正意に非ず。但し、先祖を祀り、又は主師の年忌弔ひは孝養なり。大事大切に勤むべし。生きている人を教うるが正意なり」[43]

「信行してこそ利益を蒙る。然るに信行せずして利益を蒙むらんと云うこと、三世諸仏の御説法になし」[44]

「寂光は娑婆の金銀不通用　わが信行の功徳のみゆく」[45]

と説いて、入講した信徒に日々自ら信行に励むことを勧奨した。具体的には、

「朝夕のつとめは家のいのりなり　いそがしくてもこれはやめるな」[46]

「信行は足にまかせて参詣し　口にまかせて南無妙法蓮華経」[47]

と教歌にあるように、信行の中心は御題目口唱とお寺参詣、お講参詣であって、これはその後の本門佛立宗にも伝統

として受け継がれ、信徒にとって自宅での朝夕の御題目口唱と、お寺での朝参詣や先師の命日を中心に営まれる総講、御修行と称される集会への参詣が大事な務めとなった。

2、御題目口唱行の重視

日扇師は、宗祖の本意は

「今日蓮は去ぬる建長五年四月二十八日より、今弘安三年十二月にいたるまで二十八年が間、又他事なし。只妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計り也。此即ち母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲也」[48]

とあるように、一向に御題目口唱を流布せしめることであり、日隆師もまた

「当宗の意は一経の内にも広略を捨てて要を取る、要とは妙法蓮華経也。是即ち不軽の初心始行の方法、不専読誦経典、但行礼拝の先証、是無智比丘従何所来の法則也」[49]

とその意を継承したのであるから、

「当宗は上行所傳の題目宗也。其証は神力別付は一経に非ず南無妙法蓮華経の要法の七字に限るのみ」[50]

であり、

「末法には本門肝心上行所伝の御題目より外に衆生を助くる法更になし。何れの法。何れの佛菩薩も利生得益あるべからずと云々。故に口唱の外一切利益なし」[51]

として、ただ一向に本門八品所顕上行所伝本因下種の御題目を信唱することをもって末法相応の信行であるとした。

従って佛立宗ではあらゆる法要儀式の場においても御題目口唱行に重点を置き、上行所伝の要法受持を讃歎する目的で拝唱する神力品訓読等ごく限られた機会以外、法華経の読誦は取り入れられていない。

3、勧請様式の簡素化、集約化

日扇師は佛立講を開くにあたって、その信行形態を極力御題目口唱の一行にしぼるように信徒を指導したが、御本尊勧請の様式についても宗祖が顕した文字曼荼羅以外の諸神等を別勧請することを雑乱勧請の謗法として次のように厳しく戒め、雑乱勧請を当然のごとく行っている諸法華門流に批判を加えた。

「此の御題目を万法具足の大法とも、三箇之中一大秘法とも、一経の御心とも、日蓮大士の御神いとも申し奉る也。されば何の不足の念ありて広略の読誦をし、何の不足の念ありてか観心開会の法門を習わんや。信心とは、仏祖の御教訓御指南にまかせ奉りて我も唱え人にもすすめんと行ずるを、此経の御本意を慎みて堅く守る行者とも、御弟子旦那とも申し奉るものなり」[52]

「謗法払は従多帰一を示す」[53]

「仏菩薩諸天等みな此本尊の中にまします也。外をねがうは不足の法とあなづり奉るの謗法也」[54]

「習損じの法花、本門の本尊を捨て、妙見、帝釈を本尊とするあり。稲荷といいて正体もわからぬものを本尊とし、余仏、余尊を心のままに勧請して本尊となし、上行所伝の題目は唱えず、本門の本尊を、迹門の本尊といい、迹門を捨るものは片袖法花なりと本尊をきらい、おのれは其上迹門の釈尊をも捨て、妙見清正公、狐狸をも本尊とするは、退本取迹、退大取小の謗法にもすぎたる、つたなく、はかなき、謗法ならずや」[55]

こうした日扇師の徹底した勧請様式の簡潔化、信仰対象の集約化にたいし、長松清風のやり方は偏狭すぎるといった非難が講の内外から時に寄せられることがあった。そのような非難にたいし日扇師は

「本門宗は堅固すぎる、心せましと云うをさとす一段。

貞女両夫にまみえず、忠臣二君に仕えず。一大秘法は万法を含む。本門の信心は本尊を二つ立てず。経に云く、不須復安舎利利、此中に如来の全身いますと云々。心せまきは日蓮に非ず。釈尊のみこころ也と云々。此大法を持ち此御法の心に背きて、御感応は蒙り難し。此経の御意とは此要法一大秘法の御題目には万法を含み給えり。一大聖教中の肝心御神い也。故に一法を専ら持て、餘経餘宗の宝塔を拝すれば、所持の御法をいやしみ軽んずるに成る也」[56]

と反論している。

現在も本門佛立宗内の寺院や信徒各家の御宝前（御戒壇）は文字曼荼羅の御本尊を中央にして、その前に宗祖の坐像（御尊像）、そして左右に門祖としての日隆上人と、開導日扇上人の両祖牌（両祖御霊牌）を安置するかたちで統一されており、それ以外の諸仏、諸神像の類を内陣や他の場所に別勧請することは謗法行為として戒められている。

4、現証の重視

宗祖は仏法の優劣を判定する準備として道理、文証、現証の三証を用いたが、とりわけ

「日蓮、仏法をこころみるに道理と文証とには過ぎず。又、道理、文証よりも現証にはすぎず」[57]

と現証を重視した。

日扇師は蓮隆二祖より継承した教行を幕末から明治にかけての時代の変革期にあって民衆に広く流布するため、理論よりも現証、すなわち目に見えたご利益による布教方法を積極的に取り入れ、病気の平癒や貧困からの脱却を御題目受持のご利益として強調した。

こうした日扇師の現証布教路線にたいし、佛立講は低俗な現世利益信仰だという批判が法華宗内の僧からなされたが、日扇師は

「末法悪世には、地獄極楽なしという者多く、神にも仏にも手を合わすは学者ものしりの恥也というもの多き時也。故に諸宗無得道も聞きなれて、耳にたこが出来て、取合はざる時也。かかる時節に弘まらせ給ふ御経は、本門の肝心上行所伝の御題目ばかり也。学者・不学者・貧福によらず、只現証の賞罰にて真の信心起る時也」[58]

として、終始一貫、現証布教の重要性を強調し続けた。

日扇師の打ち出した現証布教路線、すなわち病、貧、争、死等の苦しみ、不安に悩む人々に御題目を持たしめ、唱えしめることによって現証のご利益をいただかせ、それを契機として信行を深めさせるという弘通方法、信徒育成方法は現在の佛立宗においても強調されている。

5、菩薩行の実践

日扇師にあっては、人々に御題目受持口唱を勧めて現証のご利益を頂かせることは、御題目信唱の有難さ、尊さを身をもって感得させるための文字通り証しであって、それはあくまでより深い信仰の境地へ到る契機として意義づけたものであった。

日扇師は、

「日蓮が曰く、一切衆生の苦は日蓮一人の苦也。今世間の謗法にて地獄に落つる苦は此佛立講一門の苦也と、大慈大悲を仏・祖師・開山の如くに起して弘通を励み、信行にすすみ給うべき也」[59]

「弘通広宣のみを思いて仏祖の御慈悲をのみ悦ぶ。是れは現当二世を祈らざれども、御弘通の菩薩行に皆こもれり。此人は仏と経と祖師との御意に叶う本化の流類也」[60]

と、御題目受持口唱を他に人にも勧め、人助け、社会浄化に心がけることを通して、自らも本化の菩薩の流類となることを通して得る果報、境地をもって「本因妙の成仏」と規定し、

「生きかわり死にかわり生々世々凡夫の信者となりて、末法万年の外未来迄の衆生を助けんとおもい、願立し給う菩薩行をせんとおもいたのしみ喜ぶ所をば、当流の行者の心得とは申す也」[61]

とこの境地に到ることをもって蓮隆二祖の本意を継ぐものとしたのである。

小　結

宗祖から日隆師、そして日扇師と継承された化法、化儀両面にわたる活動にみられる際立った共通点は、宗祖にあっては法華経に基づいて、日隆師にあっては宗祖の遺文に基いて、日扇師にあっては日隆師の著作に基いて、自らが感得した仏教の源流、すなわち仏道のあるべき姿へと自らをとりまく宗教状況を戻そうと試み続けたことであろう。すなわち化法についていえば煩瑣で現実世界から遊離した観念的な教学を排し、機、時、国、すなわち自らが身を置く時代の状況を踏まえた上で、仏道修行のあるべき姿を表示する、信行の道しるべとしての教学を構築しようと努めた

ことであろう。

従って、宗祖にあっては「権実雑乱の時」にあって「法華経独り成仏の法」であることを闡明にするため、その視点を法華経対諸経、すなわち権実相対に置いた論述が多くみられるのにたいし、日隆師にあっては天台流に傾き本迹一致を唱える日蓮門流を憂い、宗祖の弘める法華経は本門の教説であることを啓蒙する必要から本迹勝劣義を軸にした教学論に力点が置かれることになった。しかして日扇師においては十界皆成論を根拠に回向成仏、三途成仏を説く本門法華宗内の皆成派にたいして、「日蓮が法門は第三の法門」としての十界久遠論に基いて、信行成仏をもって宗祖の本意を説く必要から、五重相対についていえば、種脱相対に重きを置く宗学構築を行うことになる。

化儀についていえば、三師に共通するのは法華経本門の肝心である南無妙法蓮華経の五字七字を我も唱え、他にも勧める口業中心の信行を勧奨したことであるが、この面でもまた三師は鎌倉初期から中期、室町初期、幕末から明治初期のそれぞれが置かれた時代の状況に応じたかたちで伝え弘めようとしたのである。

宗教史が専門の村上重良氏はその著、『仏立開導長松日扇』の中で、

「本門佛立宗の歩みは、日本近代宗教史の展開に注目すべき役割を果たして、現在に及んでおり、その開創者・長松日扇のユニークな足跡は、幕末維新期が生んだ仏教改革者として、正当に意義づけられ評価されるべきであろう」

と述べているが、宗祖、日隆師の流れを化法・化儀の両面において日扇師がどのように継承、復興し、どのように民衆の信行レベルにおいて事相化しようとしたかを確認することは、日本の近代宗教史の展開に日扇師がどのような役割を果たしたかを評価する上からも不可避の作業であると考える。

その意味で、小論が「長松日扇のユニークな足跡」を新たな角度から照射するものとなれば幸甚である。

註

(1)「佛立開導長松日扇」村上重良　講談社　S51
(2)「仏立聖典」本門佛立宗刊
(3)「南条兵衛七郎殿御書」昭和定本　三二一頁
(4)「如説修行抄」昭和定本　七三七頁
(5)「如説修行抄」昭和定本　七三六頁
(6)「富木入道殿御返事」昭和定本　一五一八頁
(7)「妙一女御返事」昭和定本　一七九八頁
(8)「本尊問答抄」昭和定本　一五七三頁
(9)日隆師の事跡に関しては本門佛立宗より『門祖十話』同宗宗務本庁刊。『隆聖讃仰』泉日恒著、本成寺刊が刊行されている。
(10)「佛立聖典」本門佛立宗　大放光社刊　八一一頁
(11)「法華初心成仏抄」昭和定本　一四一三頁
(12)「弘教抄神力品」佛立聖典　八一七頁
(13)「本門佛立講々旨」佛立聖典　八〇五頁
(14)「五帖抄」本門佛立宗刊　二八五頁
(15)「五帖抄」佛立宗義書三巻　二一〇頁
(16)「五帖抄」佛立宗義書三巻　二一〇頁
(17)「富木殿御返事」（稟権出界抄）昭和定本　一五八九～九〇頁
(18)「観心本尊抄」昭和定本　七一五頁
(19)「観心本尊抄」昭和定本　七一二頁
(20)「本門弘経抄」法華宗（本門流）宗務院刊　一巻　五五頁

(21)「本門弘経抄」一巻　一一八頁
(22)「本門弘経抄」九巻　三八三頁～三八四頁
(23)「観心本尊抄」昭和定本　七一五頁
(24)「法華天台両宗勝劣抄」七〇頁（東方出版）
(25)「本門弘経抄」八巻　六二一頁
(26)「本門弘経抄」八巻　五五三頁
(27)「本門弘経抄」八巻　六二一頁
(28)「本門弘経抄」八巻　五五三頁
(29)「本門弘経抄」八巻　二九六頁
(30)「観心本尊抄」昭和定本　七二〇頁
(31)「四信五品抄」昭和定本　一二九五頁
(32)「四信五品抄」昭和定本　一二九六頁
(33)「四信五品抄」昭和定本　一二九七頁
(34)「本門弘経抄」一巻　五〇三頁
(35)「本門弘経抄」一巻　六一頁
(36)「観心本尊抄」昭和定本　七一二頁～七一三頁
(37)「本門弘経抄」九巻　六七二頁
(38)「私新抄」日蓮宗宗学全書八巻　一七九頁
(39)「佛立宗義書」本門佛立宗刊　二巻　三頁
(40)「日扇聖人全集」本門佛立宗刊　十八巻
(41)「佛立開導長松日扇」村上重良著　五二頁～七二頁に経緯がのべられている。
(42)「仏立聖典」八〇七頁
(43)「仏立聖典」八一一頁
(44)「日扇聖人全集」八巻一〇七頁
(45)「仏立教歌集」本門佛立宗刊

(46)「仏立教歌集」
(47)「仏立教歌集」
(48)「諫暁八幡抄」昭和定本　一八四四頁
(49)「五帖抄」仏立聖典　八七一頁
(50)「日扇聖人全集」十巻　二三三頁
(51)「日扇聖人全集」十巻　二三五頁
(52)「仏立聖典」三五頁
(53)「仏立聖典」三五頁
(54)「仏立聖典」三五頁
(55)「仏立宗義書」四巻　一〇四頁～一〇五頁
(56)「仏立聖典」四十九頁
(57)「三三蔵祈雨事」昭和定本　一〇六六頁
(58)「仏立聖典」六〇一頁
(59)「仏立聖典」二七五頁
(60)「仏立聖典」五九三頁
(61)「仏立聖典」六九九頁

なお、引用文は一部を除いて読み下し文にし、現代仮名づかいに改めた。